慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「日本釋名」森立之書入れ本について：附「言元梯」「和訓六帖」
Sub Title	
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.3 (1985. 3) ,p.45- 66
JaLC DOI	10.14991/002.19850300-0045
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19850300-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日本釋名」森立之書き入れ本について

——附「言元梯」「和訓六帖」——

関場　武

一

こゝに和綴の半紙本三巻がある。題して「日本釋名」と言う。すなわちこれは、晩年益軒と号し、その軒号で世に知られる貝原篤信の著作の一つで、

劉熙がしるせるふみにならひ、日本紀・萬葉集・順和名抄以下の古書にもとづき、和音五十字をかんがみて一書をあつめ、名づけて日本釋名と

したもの（同書・自序）。而してその内容は尾崎雅嘉の「群書一覽」二・字書類が説くように、

天象、時節、地理、宮室より、衣服・雜器、虚字等にいたるまて、和訓の義を釋

したものである。元禄十二（一六九九）年に成り翌十三年に刊行された本書は、梅蘭堂都の錦の言によると

近年和国の故事に骨を折和書をあまた述らるゝ人ハ。松下見林。貝原篤信。同好古なり……右の人々轉学によつて。その述るところ、見識一段高し。かるがゆへに、假名書の文といへども白人のためにおもしろからず。又初学のものハ和書をみる事まれに。中より上の学者ならてハその書をみず。さるによつてぬし遠くして賣かぬるこそことハりなれ。その中に貝原氏のあつめられし和尓雅。歳時記。和漢事始、これらハ賣やすきものなり。八幡本紀。諺草。日本釋名。初学知要なんどハ賣とをきものなり。

ということになり（「元禄大平記」巻六—二「皆歴々の作者なりけり」）、書肆の側からすれば売れ行きがあまりかんばしくなかったもののようであるが、現存するところそう稀なものではなく、元禄庚辰之歳（十三年）京師書林上嶋瀬平長尾平兵衛の刊記を有する本およびその後印本が流布する。こゝに取りあげる丹澤文庫本も、その多くある後印本の一つである。まず書型を記す。

半紙本　三巻三冊（原装）

表紙　海老茶色地紙に卍つなぎ・雲紋艶出し模様。竪22・4、横15・25糎。

題簽　表紙左肩。子持ち枠付短冊形白紙に「日本釋名　上(中、下)」と各々別の書体で書名を印す。竪16・3、横3・5糎。

見返し　上巻前見返しを子持ち枠で囲み、その中を真中の欄が広くなるようにして縦に三ツ割りにし、中央に「日本釋名」と大きく題を記し、右に「貝原先生編」、左に「皇都書房瑞錦堂蔵」と出す。瑞錦堂とは享保から文久年間にかけて営業した京の書肆丸屋善兵衛のことである。

序題　元禄十二年朔旦冬至の松下見林の漢文体の序と、同十二年上元日の平仮名まじり文の自序の二つがあるが、双方とも「日本釋名序」と題する。

凡例　日本釋名凡例」。　目録題　日本釋名目録」。

内題　〈上〉日本釋名　貝原篤信編輯」、〈中〉日本釋名中」、〈下〉日本釋名下」。

尾題　日本釋名（中）終」、日本釋名下巻終」。

柱刻　上方に書名と巻分け等を出し、下方に○を置いてその下に丁付を記す。〈上〉日本釋名序　○一（～三）」、日本釋名凡例　○一（～六）」、日本釋名目　○一」、日本釋名上○一（～廿三、廿五～四十三終）」、日本釋名上二　○廿四」。〈中〉日本釋名中　○一（～廿五、廿七～五十八終）」、日本釋名中二　○廿六」。〈下〉日本釋名下　○一（～廿八、卅～六十終」、日本釋名下之二　○廿九」。巻上の本文第二十四丁から「宮室」門が始まり、中の本文第二十六丁から「人事」門が、下の同二十九丁から「武具」門が始まることを考え合わせると、あるいは三巻六冊立ての構想があったか。

丁数　〈上〉五十二丁半（終丁ウは後見返しに貼付）、〈中〉五十七丁半（同）、〈下〉六十丁半（うち奥付半丁）。

刊記　下巻終丁ウ尾題の左下に「元禄庚辰之歳京師書林　上嶋瀬平　長尾平兵衛　仝梓」とやゝ小さめにあり。また後見返し単太枠内を界線で縦に二ツ割にして、左に「京都書林　東洞院二條上ル町／田中屋治助」と出す。そして右欄上段に「國史有職記録写本／和歌國學物語日記／神書經書詩文俳書／諸名家随筆道之記」と四行に出し、界線を置いて下段に行草体で「御不用之品、何／書ニよらず、是又／直段宜敷買請／申ハ間、多少ニ不限／御賣拂之節ハ御／しらせ可被成下ハ様／偏に奉希上ハ」と七行に記す。すなわち本書はいわゆる元禄十三年版の後印本の一つで、嘉永～慶応年間を中心に営業した田中屋治助の発兌本である。

匡郭　四周単辺。竪約17・7、横約13・3糎。

本文　毎半葉九行。見出し項毎に改行し、見出しの下一字分を空けて語釈を始める。

印記　各巻初丁オ右上、序題や内題にかけて「森／氏」の方形朱印を捺す。

備考　刷り悪し。虫食い中巻ノドの部分に少しあるのみ。原装の綴じ糸が切れてはいるが、保存良。下小口に「日本釋名上(中、下)」と右横書き。また、匡郭上欄外や本文脇に墨筆で書き入れがあり、朱で仮名違いの訂正や傍線を施している。右上りのくせのある書風よりして、小口書きを含めすべて森立之の手になるものと認められる。

二

さて、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象～地名までの五類、中巻を水火土石金玉～介類の九類、下巻を米穀～虚字の九類、合わせて二十三の部類に分かち、総計一千百五の項目を立てて、語源を中心とした解説を記しているものであるが、この丹澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家の典医で、のち江戸に出て医学館の講師となり、医学、とりわけその考証の学を得意とした、枳園森立之（文化四～明治十八年）の書き入れが見られる。詳しくは本稿末に付した翻刻を参照されたいが、朱筆と墨筆によるその概要は次の如くである。

まず朱筆による書き入れであるが、目録の部類分けの個所に、検索の便をはかって、各々の部類が始まる丁数を記入しているほか、目録丁ウラ上部に、「和音五十字」として掲出されている五十音図の、あ行のエ・ヲをエ・オ、や行のキをイ、わ行のイ・オをキ・ヲに直したり、凡例五オ第六項中の「錢（セン）」や「紫菀（シヲン）」の「ン」の傍に「ニ」と記したり、魚類十三―1「鯉（ライ）　こいはこえ也」の「イ」「い」を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一―16「氷（ヒ）」、時節二―2「年」などの項目をはじめとして三十ケ所以上にわたって本文右脇に点を振っている。要するに朱による書き入れは、仮名違いの訂正と加点が主ということになる。それらも無論等閑視すべきでないが、次にあげる墨筆による書き入れは、立之の考えをより直接的に示すものとして重要である。

翻刻にあるように、立之の墨筆書き入れは、「日本釋名」二十三門のうち十二門にわたり、項目数で言えば十二門六百十六項のうち七十項目についてあるということになる。そしてその中に、後で紹介する「和訓六帖」「言元梯」を引くものが十六と三、計十九項ある。今、それぞれについて数値を示すと（最初にあげる数が「日本釋名」の項目数、（　）内が立之の墨筆書き入れのある項目数、「帖」「言」は各々内数で「和訓六帖」「言元梯」をさす）

一、天象　四〇（一八〈帖三、言二〉）、二、時節　五〇（二〇〈帖八〉）、三、地理　八三（五〈帖四〉）、四、宮室　四七（二）、五、地名　四〇（四）、六、水火土石金玉　二二（一）、七、人品　七三（〇）、八、形體　七一（〇）、九、人事　一〇〇（〇）、十、鳥類　三一（〇）、十一、獸類　二三（〇）、十二、蟲類　二三（一）、十三、魚類　二四（七）、十四、介類（カイノ）　一〇（二）、十五、米穀　二四（〇）、十六、草　六四（〇）、十七、木　七〇（四〈言一〉）、十八、飲食　一八（〇）、十九、衣服　三二（〇）、二十、文具　一二（〇）、二十一、武具　四一（〇）、二十二、雜器　九八（一〈帖一〉）、二十三、虚字　一〇九（五）

の如くである。書き入れの位置は、該当項目の上欄、匡郭外であることが多いが、一―14烟（カスミ）、15霧（キリ）、17霙（ミゾレ）のように、本文の末や左脇に記してある場合もある。また、筆勢等よりして、書き入れは少くとも三次にわたってなされたものと推測される。また「和訓六帖」「言元梯」の書名は、題名のすべてを記す場合もあれば、「六帖」「六占」、「元梯」のような省略形を採る場合もある。木十七―68榎（エノキ）に「元言梯」とあるのは、単なるまちがいか、それとも底本前見返しの題によったものか。立之自身の説は、はじめに「立之案」とするもの、「案」とするもの、何もなしにすぐに自説を書きつけているものの三通りがある。

三

ところで右の「日本釋名」は、日本語の語源を記した書物として夙に有名で、鎌倉期経尊著すところの「名語記」、江戸期の貞徳の「和句解」、契沖の「円珠庵雑記」白石の「東雅」、等と並び、よく引きあいに出されるものである。しかしながら

和語をとく事、謎をとくが如し、其法訣をしるべし、是をとくに凡八の要訣あり

として、自語・轉語・略語・借語・義語・反語・子語・音語の八つの原理を説き、また

此書の内、和語をとくに、二、三説をあげたる所多し、大やうはじめの説をよしとす

という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分の評価の高さに比べ、肝心の実際の語源説明部分に対する評価の相当に低いのが通例である。前引の「元禄大平記」巻六でも

貝原氏の作書の内に、日本釈名ハ。うたがハしき事すくなからず。たとへバ雷といふ和訓を、いかりて地に落ると釈せられしハ、心もとなし。そのいかりといふことバの出所は。源何によりて起りたるぞや。いかづちもとよりかたちなし、いかりて落るやら悦んでおつるやら。その心なけれバわきまへがたし、しばらくかんがふるに。論語郷黨の篇、迅雷の註に、敬二天之怒一と朱晦庵の説によつて、かやうに釈せしならん。また倭の訓を山背に對して述られし事、入ほがなる説なり。その外うたがひをゝけれど、事繁けれバ虚におぼえず。

として既にして喝破されているくらいである。松永貞徳の「和句解」によった部分がありながら、それを明確にせず、これまた都の錦がいぶかしんでいる「神代直指抄」を援用する部分が目だつなどの欠点もある。それにつられてか森立之の書き入れも残念ながら低調である。紙幅の都合上、細かい考察は他日を期すとして、今は、ただ立之研究その他に些少の資料的価値もあろうかと、翻刻を提出するのみである。

四

さて、森立之が書き入れに利用している「言元梯」と「和訓六帖」であるが、両者とも語源辞典としての機能をもつ。前者は大石千引の編で、天保五（一八三四）年十二月に刻成しもの。後者「和訓六帖」は、二本松藩の儒官服部大方の手に成る「名言通」（天保六年十月刊）の改題後印本で、弘化三（一八四六）年三月に刊行されたものである。まず「言元梯」から紹介する。

書名の「言元梯」は「ケンケンテイ」と読み（「大略」の題の振り仮名）、「言語ノ元ノ梯」の謂で（同「大略」）、五十音順の標目を立て、その中に第一音節の五十音による見出しを配列し、その下に簡約したかたちで語源を示しているものである。項目数は試算すると、（あ）二五三、（い）一二六、（う）一二四、（え）一、（お）一三四という具合で、〈あ行〉六三八、〈か行〉六八七、〈さ行〉四八八、〈た行〉五三一、〈な行〉二七二、〈は行〉五一七、〈ま行〉四〇六、〈や行〉二〇六、〈ら行〉五（る・れナシ）、〈わ行〉一八二の、計三九三二項。但し「ね」29の「子」の項の個所では、子に続けて丑～亥までの十二支をすべてあげ、各々その語源を示してある。したがって純然たる「ね」だけでは二九項ということになるが、右で

は便宜上すべて「ね」の中の一項として数えてある。

内容の一端は、本稿末に付した翻刻部分からもうかがい知れようが、「日本釋名」や後述の「和訓六帖」に比すと、説明の簡単な項目の多いのが特徴と言え、簡単すぎて

精細、愛妙、妙甘美、細愛（く・1～4）、細小間所（こ・38）、味甘美、甘美妙（う・1～2）

というぐあいに堂々めぐり的になってしまっている点も散見される。なお

喜勢留烟吸ル、銀杏黄子甘、義耶万牟火和（き・78～80）

等は御愛敬であろう。以下、諸本の調査が済んでないので心もとないが、参考までに手近にあるⒶⒷ二本によってその書型の概要を示しておく。

大本　一冊

表紙　縹色布目地紙。竪25・5、横17・8糎。

題簽　Ⓑ本によると、表紙左肩、子持ち枠付雲母引短冊形白紙。「言元梯　完」。竪17、横2・95糎。

前見返し　Ⓐ黄紙。単太枠内を、真中の欄が他より幅広くなるように界線で縦に三ツ割。中央に「元言梯」と大きく題を掲げ、右に「大石千引先生著」、左に「天保甲午蒭月刻成」と記す。Ⓑ本は、雲母引淡黄白色紙。枠は子持ち枠。中央の題は「言元梯」と正しくなっている。

序題　言元梯の序」（①天保五とせ秋の半月のかけまつ窓の下に成島司直書。②天保いつとせしはすの末つかた天野政徳しるす）。

内題　言元梯」。次行左下方に「新武蔦飾　大石左衛門源千引著」と記す。

刊記　Ⓐ後見返し単枠内。上方に「發行書林」と記し、下方に「京都寺町通松原下ル／勝村治右衛門／同富小路三条下ル／須原屋平左衛門／大坂心齋橋通北久太郎町／河内屋喜兵衛／江戸日本橋通壹丁目／須原屋茂兵衛／同日本橋通四丁目／須原屋佐助」の三都五軒の書肆名と所在地を列記する。但し後印のものかと思われる。なお奥付の前に「臨時客應接」「截縫早手引」の内容紹介を行なっている金花堂須原屋佐助の広告一丁分がある。Ⓐ本は即ち須原屋佐助版であろう。Ⓑは刊記ナシ。

柱刻　白口。序および巻末広告部分には無し。「言元梯大略壹（～陸）」、「言元梯　一（～六十三）」。Ⓑ本には跋が三種あるが、はじめのものには柱刻無く、二番目は一（～三）の丁付のみ。最後のものに「言元梯跋　一（～二）」とあり。

丁数　Ⓐ七十五丁（但し12ウ、75ウは空白）に広告一丁と奥付。Ⓑ八十一丁〈序六、大略六（12ウは空白）、本文六十三（75ウは空白）、跋六丁〉。

行数　本文毎半葉十行。割り注あり。字数　一行十三字。序跋と本文の五十音分けの標目、Ⓐ本の巻末広告をのぞき漢字片仮名まじり。

匡郭　広告や奥付・前見返しをのぞき無し。字高　竪約19・5、横約12・5糎。

備考　前述の如くⒷ本に跋文が三つある。①言元梯跋」（平仮名まじり文。天保三年正月はしめ。まなひ子　池田貞時）。②

題ナシ（和文、漢字万葉仮名表記。文政十三年正月田澤仲舒識）。③言元梯跋」（漢文体、天保五年秋七月邨井又玄藤原千清謹識）。

なお巻頭序文の後に「言元梯大略」あり、その末に「文政十三庚寅年十一月廿五日　野乃舎老人識」と刻す。即ち本書はその頃の成立にかかるものか。

五

次に「和訓六帖」であるが、これは前述の如く

此書ハ、天地萬物より平生言語に至るまで、雅・俗となく、和語・和名のことわりをしめし、正しく漢字をひきあて、人世入用の品はいふにおよばず、鳥獣草木にいたるまて、その義を委くして、のこる所なし、実に日本の字典・正字通ともいふべし、されバ和学哥学の家ハ勿論、漢学にも其益すくなからず、又本草・物産家にも必たより有べし、因て各一部をそなへなハ、至極の重宝ならむ、その外すべて人家に於て和漢字の節用となす時ハ、また其益あるべし、猶見て知りたまふべし

と和泉屋吉兵衛の広告にうたう服部宜著「名言通」の改題本である。まず左に各々その一本による書型を記す。

A、名言通

大本　二巻二冊（原装）

表紙　海緑色布目地紙に花菱・唐草格子模様空押し。角布、緑。

　　竪25・8、横18・15糎。

題簽　単枠付短冊形淡香色紙。表紙左肩。「名言通　上(下)」。

　　竪17・65、横3糎。

前見返し　山吹色紙。上方に「天保乙未新鐫」と右横書き。その下を子持ち枠で囲い、中央の欄が幅広くなるように単線で縦に三ツ割にし、中央に大きく「名言通」と出し、右に二本松「服部先生著」、左に「東都書林　名山閣繡梓」と刻す。

序題　①名言通序」（癸巳孟夏　松崎復撰）、②自叙」（天保六年乙未春二月望　服部宜識）。

内題　名言通上（下）／信濃　服部宜著／男　厚校」。

柱刻　〈上〉松序　一（～三）」、自叙　一（二）」、凡例　一（二）」、五十音説　〇一（～五）」、名言通三〇巻上　三一（～四十八）」。〈下〉名言通三〇巻下　三一（～五十三）」。巻末広告三丁分および奥付には柱刻ナシ。

尾題　名言通上（下終）」。

刊記　単太枠内を界線で縦に二ツ割にし、右に「名言通次編追出／大日本風土略推萬國考古今事事有證言言的當　近刻」、左に「天保六乙未年冬十月／書肆／京三条通松原下ル／勝村治右衛門／大坂心齋橋通安堂寺町／秋田屋太右衛門／江戸両國吉川町／山田佐助／同芝神明前／和泉屋吉兵衛」と記す。なお本文末、刊記の前に「名言通」を含む「書林名山閣藏板目録（江戸芝神明前　和泉屋吉兵衛）」三丁分があり、計47点の書物の広告を記す。上巻前見返しの表示と合わせ、版元は名山閣和泉屋吉兵衛であると見てよかろう。

行数　有界九行。注は双注、反切は多く陰刻。

丁数　〈上〉序五、凡例二、五十音説五、本文四十八、計六十丁。

　　〈下〉本文五十三、広告三、奥付半丁、計五十六丁半。

匡郭　単辺。竪18・6、横12・92糎。

B、和訓六帖

大本　二巻二冊

表紙　濃縹色布目地紙。竪25・6、横18・5糎。

題簽　単枠付短冊形白紙。表紙左肩。「和訓六帖　上(下)」。竪17・25、横2・95糎。

前見返し　A本と同版。但し上方にあった「天保乙未新鐫」と右にあった「二本松」を削り、中央の題「名言通」を「和訓六帖　全二冊」と改刻してある。

序題　①の松崎復の漢文体序の題を「和訓六帖序」と改刻。但し文中にある「名言通」の書名はそのまま。②の「自叙」は全文削ったものか、手もとの本には見当らない。要再考。

内題　書名・巻分けのところだけ改め、「和訓六帖上(下)」としてある。

柱刻　書名の「名言通」の部分を削る。

尾題　〈上〉「上終」とのみする。紙数節約のためか、「和訓六帖」上巻は、「名言通」上巻終丁にあった項目数の表示と尾題を、その前の丁、最終行本文末に移し(各々改刻)、天と人の分類の意義についての一文を削除してある。なお項目数がAに「天人凡一千百六十三名」と示してあったものを、「和訓六帖」では「天人凡一千八百六十三名」としてしまっている。〈下〉「和訓六帖下終」と改刻。

刊記　単太枠内の右に「弘化三年丙午季春完刻」と大きく出し、その左に「書房」と右横書き、その下に「京都三条通舛屋町　出雲寺文次郎／大坂心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門／同心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛／同心齋橋通博勞町　同茂兵衛／江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛／同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛／同芝神明前　岡田屋嘉七／同同所　和泉屋吉兵衛梓／同本町三丁目　同善兵衛／同槫正町　同半兵衛」の十名の書肆の所在地と名前を列記する。すなわち「名言通」と同じく名山閣和泉屋吉兵衛が版元である。

丁数　〈上〉序三、凡例二、本文四十七、計五十二丁。但し諸本を精査していないので、「自叙」および「五十音説」が他本にも無いものか要調査。〈下〉本文五十三(但し終丁ウは「名言通」にあった漢文体の跋文が削除され、罫線のみとなっている)、奥付半丁、計五十三丁半。

行数　「名言通」に同じ。

匡郭　単辺。竪18・55、横12・9糎。

備考　右に示した相違点をのぞけば、A本と同一の版木を使用しての出版である。

すなわち、B「和訓六帖」はA「名言通」の改題・後印本ということになる。而してその内容は次の如くである。まず配列や項目数について見ると、凡例に

コノ書、物名・言語分テ上下トシ、物名ハ天・人ヲ分チ、土ト金石草木トハミナ天ニ属シ、鳥獣蟲魚ハ人ニ属シ(中略)言語ハ別ニ五十音ニ分チ、捜索ニ便ス

とあるように、上巻を物名、下巻を言語の二つに大別し、物名を天部と人部に分ける。そのうち天部は、その標目の下に「總ニ土及金石草木ニ」とある通り、〔天〕〜木類の六類に分け、試算によると

〔天〕一一六、土類四九、金五、石五、草一五〇、木類九七

の計四二二項（本文末には「通計四百二十三名　所レ属不レ筭」とあり）の見出しを立てている。そして人部は、同じく標目の下に「言語為レ外鳥獸蟲魚属レ此」とある如く、〔人〕〜魚類の十三類から成り

〔人〕一三、人倫四九、等差一八、身體一〇一、疾病三三、飲食二三、衣服附褻器四六、宮室六七、器用舟車雑具附一八九、鳥類五七、獸類三四、蟲類三三、魚類七三

の計七三六項（本文末には「通計七百四十名　所属不レ筭」とあり）を立て、語源その他を説く。また下巻は言語門のみで

ア部五十、附三七、イ部五〇、附二八、ウ部四四、附一八、エ部三、附三、ヲ部一三、附九

という具合に、ア行一六〇、附九五、カ行一四五、附七三、サ行一一〇、附八九、タ行一四〇、附八二、ナ行七九、附四五、ハ行九八、附四八、マ行八三、附五二、ヤ行（ヤ、ユ、ヨ）三四、附三三、ラ行（ラ、レ、ロ）附のみ八、ワ行（ワ、キ、エ、オ）六八、附二八の計九一七、附五五三、あわせて一四七〇項（末には「通計九百一十六言　所レ属末レ筭、附五百五十三言、合千四百六十九言」とあり）を収載する。そしてこの言語門は、凡例に「言語、字數ニヨル」とある如く、各々の部の中が、例えば「あ部」で言えば、1の「有（アル）」〜9「涸（アセ）」までが二音節語、10「新（アラタ）」〜32「炙（アブル）」までが三音節、33「新（アタラシ）」〜50「暖（アタタカ）」が四音節語というぐあいに、所謂早引節用風の音節数順配列となっている。また同じく凡例に「物名・言語、文字ナキモノ、類、雅俗トモニミナ、五十字毎字ノ下載セテ附トス」「内和外漢助辞、大要ヲ用ヒ、亦以テ附トス」と言う如く、各々の部の終りに、

アナ、アイ、アテ、アナタ……アンチウコツタ、アヂヤフニモ
カヂヤフニモ

という具合に、必ずしも漢字表記を伴わない和語を「附」としてやはり音節順に並べ、次に「豈」「剰（アヤマツザ）」のような所謂助辞・助語のたぐいを音節数順に配列してあるのが特徴である。

いずれにしても「和訓六帖」すなわち「名言通」には、上巻と下巻を合わせて計二六二八項が見出しとして立てられている（原本下巻末には「名・言合二千六百三十二」とする）わけである。しかし例えば、下巻37オ上欄外に「アカ」48ウに「キセル」等の説明が記されていたり、本文解説中に見出しに関連して色々な語例が掲げられているので、実際の収録語彙数はもっと多い。その内容の一端は、本稿の末に記した「日本釋名」の翻刻（抄）を参照されたいが、始めに見出しを漢字・フリ仮名付きで掲出し、その下に語源を記し、陰刻（凡例に言う「白字」）で「詞ノ延約」（反切）を示し、その下に双注の形式で語釈等を綴るという方式を原則として採り、前述の「言元梯」とは対照的と言えるほど説明の長いのが特色である。二、三例をあげると

蟬（セミ）　ソノ鳴声ナリ　田舎ニアリ、声セミ〳〵ト云フガ如シ、京ナドニテ云フセミノヿ、或ハ別ニソノ名アリ、山陽諸国ナドニハ、ソレヲ松虫トスル処アリ、秋ノ松虫トヒトツ名ナリ、ソノ物多ク松ノ木ニ取ツキ鳴ユヱ也、ヒグラシハ、日クレスヾシキニ乗ノ鳴ク、カツタゼミトモ云フ、カツタハソノ声ナリ、チカラゼミハ声ミン〳〵ト云フガ如シ、力ヲ入ルヽヤフニ聞ユル故ニ、力セミ（ラ）トス、ツク〳〵ボウシハ、コレモ声ナリ、ツク〳〵ボウシ古クツ〳〵ボウシト云フ、又ウツクシヨシナドモアリ、

末ニハツクリンギヤウシト云フガ如シ、ハルゼミハ、春三月ノ頃出テ鳴ク、ソノ声尋常ノ蟬ニ似テ少シ差アリ、コノモノ、蟬ノイチ早ク出ルモノ也、凡セミノ類又種々アリ、予西藩ノ人云フヲキ、シニ、ソノ処ニカナセミト云フアリ、カナセミハカネセミ蟬也、ソノ声ジヤン〳〵ト云フガ如シ、故ニ云フ、又チイ〳〵ゼミアリ、チイ〳〵ハソノ声ナリ、二三月出テ鳴ク、ハルセミトモ異リ、按スルニ山民或メウチント云フ、ソノ声ヲ妙トスル也（巻上・物名・人部・蟲類18）

アシラフ　京人應接ヲ云フ、合アハスル也、アハ反ア、ル延ラフ（巻下・言語・ア部・附12）

アンチウコツタ　安房人ナトノ詞、何云ヌナニトイフコトナラン也、亦嗟賞スル意ナリ（同30）

の如くである。もとよりそれらの説は、すべてが著者服部宜の独創にかかるものであるというわけではなく、

前人ノ説取用ルモノ、必シモソノ名ヲ載セス、或ハ取捨スル処アリテ、辯論煩シキニヨル、中ニ僧契沖、荷田東満、加茂真淵、本居宣長、荒井田久老、谷川士清、橘千蔭、コノ數人ノ説、尤多ク取用ル処ナリ、又物産家一二有名ノ士ノ説亦然リ

と凡例に述べているように、諸説を勘案している面も見られる。貝原好古の「諺草」の説を批判している場合（巻下、インノコ〳〵、レロ〳〵）や、井澤長秀の「本朝俚諺」を引いている場合（ヲコノモノ）等もあり、典拠その他について今後検討を要しよう。なお「名言通」奥付に「名言通次編　追出」とあり、凡例でも「古語及方言俗語、書中略スル処、次編トス」と言っているとおり、次編を出す計画があったらしいが、詳細は不明である。

〔翻刻〕

凡例

一、丹澤文庫所蔵の森立之手沢本「日本釋名」を底本とし、立之の書き入れのある項目のみを翻刻し、※印の下に立之の書き入れを掲出した。またその書き入れに「言元梯」や「和訓六帖」の名が見える時は、各々の書の該当部分を次に併出した。

一、翻刻に際しては、字体を概ね通行のものに直したほか、私に改行、句切れを施し、字配りも適宜変えてある。引用項目に付した算用数字は、私につけた項目番号である。

一、原文翻刻の末に我流の覚え書き風の略注らしきものを付した。文献の引用の仕方や注の設定もかなりに恣意的であり、かつ忽卒の間に作成したメモであるから、誤りもあろうし、参照すべき文献を使用せず当然あるべき個所に注が無い等、種々の破綻を露呈していると思われる。したがって、参看に際しては十二分に注意せられたい。なお今後補訂作業を行なうつもりである。また「万葉仙覚註」、「言元梯」閲覧にあたり御世話いただいた相原一・石川俊一郎、平沢五郎の各氏に、深く謝する次第である。

翻刻

（上一、天象・1）

天地（アメツチ）　あめの反字ハ（カハシ）（注1）ゑ也、ゑハひらくかな、陽（ヤウ）也、つちの反字ハち

也、ちハとづるかな、陰也、あめつち皆上古の時の語也、此類を自語と云、神代直指抄に曰、本朝最初言語音聲の初に、あめと云て、たかき義たふとき義を取り、陽道をあらハし、つちといふハ、ひきゝ義いやしき義を取て、陰道をあらはす（注2）

※案、アメハ雨ナリ、ツチハ土ナリ、物ノ天ヨ降ルハ、雨ヲ以テ最明徴トス、地ニ在ルハ、土ヲ以テ最明徴トス、故天ヲサシテアメト云ヒ、地ヲサシテツチトイフナリ、アメノアハ、アフグノアニテ、上ヨリノ義、メハ、ミヅ也、ウハノ反リア、ミツノ反リメナリ」、ツチノツハ、トヂルノ義、トチノ反（一字分消ちあり）ナリ、チハヒチノツマリ也、即閉土ノ義ナリ

（同・2～4）

陽 ぎと訓ず、剛き意也、又おと訓ず、男也

陰 みと訓ず、柔かなる意也、又めと訓ず、女也、ぎみは陰陽の本訓也、是又自然の語也

神 かみは上也、かみに在てたふとむべし、直指抄に見えたり、又陰陽の和訓をぎみといふ、かときと相通なれば、陰陽と云意も有べし、神ハ陰陽の霊なれば也、鏡の中のがの字を略せりといへる説あしき由、直指抄に見え侍る、鏡のいまだ出来ざる時、すでにかみの号ハ有べし、上の字の正訓をとらずして、鏡を取て附會する、すべてかやうの類、皆ひが事也（注3）

※案、今俗語、ギミガマト雑言争論スルナドイフコアリ、蓋ギミガマハ陽陰神ノ轉ニテ、白シトイヘハ黒シト云、剛トイヘハ柔ト相争フノ義ナランカ

（同・5）

日 天地はしめてひらけし時より、すでに日あり、是自然の語なるべし、或説、日ハ火の精なるゆへに名づく、又ひると云説あり、日にあたりて物ひるなり、此等の説、用ひがたし、日は上古の自語なれバ、日の訓をかりて火をひといふなるべし、ひるといふことばハ日より出たり、日は母語也、ひるハ子語也、子語を以母語をとくべからす（注4）

※案、ヒトイフ詞ハスベテ、ヒラク、ヒロガルナドノヒニテ、天日ノコニ用ヒ来レル也、彼土ニテ日ハ實也トイヘル音ト其義同シ、ハ行ノ音ハスベテ、ハビコル意アリ（注5）

（同・6）

月 是亦自語なるべし、或説尽也、かけて皆つくる也、刈凞が釋名に月ハ缺也といへるに似たり、凡神代の言は今よりはかりがたし、旦又自語おほかるべし、今みだりに其義をとくとも、あたらぬ事なるべし（注6）（注7）

※案、月ヲツキト訓スルハ、即チ月ハ闕也ト同義、満月ハ僅半時許ニテ月末ニハナキニ至ル、コレカケツクルニ似タリ、故ニツキト名クル也

（同・7）

星 ほハひと通ず、しハ白き也、星は日の光をうけて白し、下を略す

※案、光少シノ義、少・小ヲシト訓スルハ、賤 皴 蜆 萎ノ類コレナリ

（同・8）

風 ふかせなり、虚空よりふかする也、但上古のことは其名つけし意はかりがたし

※案、カゼハカスヱ、コヽヨリカシコヘフクノ名ナラン、セハ、香末

セル、セムナドノセナラン、セリコムノ義ナリ

（同・10）

雲 仙覚[注8]が萬葉の註に。くは内へまくりいる詞、もハむかふ義、篤信云、此説うがてり、くもハ上古の自語なるべし、或[注4]くもると云意なるか、但くもは母語にして、くもるハ子語なるか、凡仙覚が説、よきもあり又ひがめるも多し、ことゞくは用がたし、よきを取、ひがめるをすつべし[注9]

※案、クモハ、コモルノ義、クコ一音ナリ

（同・12）

霜 下にあるの義也、霜満レ[注10]天などいへ共、かたちのみゆるは下にあり、又高山に霜なし、一説しは白也、もはさむき也、むともと通ず、白してさむきなり

※案、シモハシラアメノ義、又案[注11]、白萌ノ義、霜ハ地上ヨリモエアカル也、シモバシラナド微スベシ

（同・13）

雷 いかりてつちにおつる也（↓解題48頁上段参照）

※案スルニ、イカハイカル義、ツチハツドフ也、ツトヒ・トフノ反チトナルナリ、雲ノ中ニイカタテル其形、之ヲ望ムニ一所ニ聚リ轟ク故ニ、カク名ケシ也、古文ノ雷ノ字（見消ち）

如此、亦證ト為ベシ

一説ニイカダチノ音轉、即怒リ立ツノ義也ト、又通ス

（同・14）

烟 春。かすみたてハ、野も山もあらはに見えず、かすかに見ゆる也

※霞、赤染和訓六帖也 アカソミ 案スルニ、本ト日上ノ赤気[注12]朝霞暮霞ノ名ヨリ轉メ、春霞ヲモカスミト云フナリ、叚ノ声ニ赤キ義アリ、瑕・蝦ノ字是ナリ、銭坫ハ瑕ノ本字トセリ、従フベシ

（帖）上・物名・天部8「霞赤染 アカソミ也 朝ヤケ夕ヤケ也、俗春霞ヲ霞ト云フハ誤リ轉セシ也」

（同・15）

霧 きハけ也、きとけと通ず、気降也、ふを略す

※案、キリハクラムコルノ義、キリタツハクラミ立ナリ

（同・17）

霙 水あられ也、縦横二重相通の反なり、此類も亦多し。らを略す、雨とあられとまじるを云

※六帖同説 霰和

（帖）上・物名・天部13「霙水霰 ミゾレ也ラレ反レ、和名抄霰亦ミゾレト訓ム」

（倭名類聚鈔）巻一・天部・風雪類第三12「霰 爾雅註云、霰冰雪雜下也、七見反、又作レ霹和名美曾禮」。13「霙 孫愐云、霙雨雪相雜也、音於驚反、文選雪賦師説曰三曾禮」（江戸時代後半に最も流布した所謂渋川版後印付訓本による）。

（同・18）

嵐 山風ハあらき物也、又草木をふきあらす也、文屋康秀の哥に、吹からに秋の草木のしほるれバむべ山風をあらしといふらん、といへるがごとし

※アラシハ荒風[注13]ノ義、古言ニ風ヲシト云フ、富士ハ吹ク風ノ義ナリ、嵐ハ本ト梵語ニテ毘嵐婆ト書ク、又嵐婆トモ又藍婆トモ書ス、元ト嵐ノ字ト相渉ラヌ也

（同・28）

梅雨 つゆハ露也、正月より四月まで陽気のほる、五月に一陰生ずる故、春よりのぼりし陽気くだる時、なが雨ふる、たとへば、こしきの下に火をたきて気のぼる時は、釜の上の水気下へおちず、火をたかざればのぼる気なくして、こしきの上より水気くだりてつゆとなるが如くなれバ、五月雨をつゆといへるなるべし

※言元梯ニ入梅 熟 梅実熟也（つ・84）

（同・29）

虹 にハ丹也、あかき也、しハ白也、にじハ紅白まじはれり

※六帖 ニスヂ也、スチノ反シ。シノ轉チ也

（帖）上・物名・天部18「虹 丹條 ニスヂ也、スヂ反シ、ノヂハ轉ナリ

（同・32）

織女 女星の名也、由阿が詞林采葉抄に曰、たなとはそらと云詞也、たなくもと云も天のくもる也、棚と云もそらにつる故也、然レばたなバたとハ、そらのはたと云事也、そらのはたおりひめ也

※手ノ機元梯

（梯）た・136「織女 手機」

（上・二・時節・3～6）

春 晴也、冬は陰気多く、春天ははれ多し、一説に、はるハある也、冬ハよろづなくなりしに、春にいたりて萬物發生して有となる、又云、張也、草木のめ、はる也、初の説を用ゆべし

夏 あつ也、あとなと通ず、夏はあつし

秋 明かなる也、秋天は清明也、或云緋也、草木あかき也、一説、なき也、萬物秋に至り零落し、かれしぼみてなくなる、春を有と云に對せり、是も初説よし

冬 ひゆ也、ひゆは寒也、ひ・ふ相通

※春ノ草木ノ芽ハ|ルモノ、秋ニ至テ零テ空明ニナル反對トス、夏ノアツキト冬ノヒ|ユル、是亦反對トスルナリ、亦二至二分ノ義也

（同・19）

朔 月たつ也、二日ふたか也、かは日也、かゝやく意、其餘のかの字皆同し、六日のいは引音也、七日ハなゝか也、ぬとなと通す、八日のうハ引音也、むゆか・やをかと云ハひが事也

※たつハ、春たつ・秋たつのたつト同じく、其日よりして其月ニ改まり立つの意なり

（同・21）

既望 十六夜の月也、いざよふハ、やすらふ意也、日くれて少やすらひ出る也

※古事記ニ猶豫を伊佐用布ト訓セリ、コノ義ナリ

（同・23、24）

朝 ひるのいまだあさき也

晨 あはあさき也、したハ下也、日のいまだあさくして、天の下にひきくある時也、一説足立也、夜いねたる者、足たちておくる也、前説を用ゆべし

※アサハアシタノツマリニテ、一語二分也、アハ明ノ義、シタハ詞ニテ、サツハリト明ケタルニテ、平旦爽朝ノ義、シタト云フハ過去ノ詞、明ケキリタルノ意、サト云フモ同シ、一説ニシロタヘノロ・ヘヲ畧ス、明白妙ノ義ト又通ス

（同・26、27）

晝 ひのほる也、中天に日のほる也、中略也、日は母語也、ひるハ子語なり、一説此時物のうるほひひるゆへに、ひると云

夜 よるはいる也、日入なり、いとよと通ず、又昼出たる人、夜ハ一所へよる也、よるハあつまる意、前説よし

※ヒルハ開張ノ言、ヨルハ合閉ノ言、ヨト云ヒ、ヒトイフ、即日夜ノ訓ルハ、ヒラクノハタラキヨリ、ヨルノハタラキ也、天地ノ気ノ開閉ヲイフ也

(同・29)

宵 夜居なり、夜いまだねずして居る時を云

※ヨヒハ夜端也、ハシノ反ヒ也六占上ノ三オ　ヨハハ夜深也、フカノ反ハ也同上

(帖)上・物名・天部29「夜暇有イトアル也、イト反ヨ、ヨハヽヨフカ夜深也、フカ反ハ、サヨハマヨ真夜也、マトサト通スル例多シ、ヨヒハヨハシ夜端也、ハシ反ヒ、ヨタヽハヨウタヽ夜轉也、タヽヲ直トスル説ハ非ス、ヨナ〳〵ハヨニハ〳〵也、ニハ反ナ、アサナユフナヲ万葉集ニ朝魚夕菜トカキタルハ、仮字ナリ、ソレニヨリ惑フヘカラス

(同・30)

一昨日 萬葉十七巻紀朝臣男梶應詔歌(注17)に、おとつひも昨日もけふもとよめり、おとハあとなり、あとおと通ず、あとつ日なり、昨日のあと也、つはやすめ字也、俗にハおとゝひと云、つととゝ通す

※ヲトツヒハ遠ツ日也(注18)同上(六占)

また右に掲げた「日本釋名」引用の万葉歌の「おとつひ」の左横に「前日万」(注19)と書き入れがある。

(帖)上・物名・天部46「一昨日遠日ヲチツヒ也、万葉集前日ヲ云フ」

(同・33)

明日 あすとハあかす也、けふあかして後の日也

※アスハ明ケ去ル也六占

(帖)上・物名・天部43「明日明去アケサル也　サル反ス」

(同・35)

去々年 萬葉にハ前年とかけり、あとゝしなり、去年のあとの年也、をとあと通ず、一昨日をおとつひと云が如し、此外にも説多し、不可用(注20)

※六占　オトヽシハ遠チ年也(注21)

(帖)上・物名・天部41「去去年遠年ヲチトシ也　万葉集前年ヲ云フ」

(同・36)

去年 こずの年也、さりて重ねてこざるとし也、そとすと通ず

※コゾハ越エ去ル也六占

(帖)上・物名・天部40「去年越去コエサル也」

(同・37)

古 神代直指抄云、いにしハ去ぬると云義也、へはうつほ字、むかしへなど云がごとし、今案、いにしハいぬる也、去の義なり、一説、へハ世也、へとよと通ず、いにし世也、此説も又よし

※イニシヘ往方也六占(天部・35)

(同・38)

昔 むなしといふ詞、横の通音にてかとなと通ず、過去たるあとの事ハ、むなしき也

※ムカシハ見越ミコシ歟、或云ムクシ

向ムカヒ也六占（天部・37）

（同・39）

世 神代直指抄に、よるといふ義也、篤信が云、世とは、人のよりあつまりておほき意なるべし、世に出る、世をのがるなど云を以しるべし

※寄ヤドリ也六占

（帖）上・物名・天部38「世寄ヤドリ也　ヤト反ヨ」

（同・44）

未 日辻也、日の西へゆくつじ也

※日傳ジ　シハ御□也、ツタヒツタフ　ミミノ反ツ、タヒノ反シ也

（同・49）

浮世 世変のさだめなきハ、水の上にうかべるが如し、一説に憂世とかく、世にすめバ常にうき事のみ多し、人生難レ逢二開レ口笑一といへるが如し、からの書にも浮世とつゞけり（注22）

※唐詩、又得浮生半日閑なとコレナリ、浮世といへる漢語ハ、定め無き世をいへるものニて、此邦ニてうきよといへるに當たるなれハ、和名のウキヨハ憂き世の義にて、義異なりとす（注23）

（上・三・地理1～4）

東 日頭なり、らの字を略す、日のはじめて出る所、かしら也（注24）

※案、日赤シノ義

西 いにし也、日は西へいぬる、日のいにしと云意、いを略す

南 萬物皆みゆる意、日の南にある時、あきらかにしてみな見ゆる也

北 直指抄云、北方ハ其色黒し、上古にハ黒き色をきたなしと云、なしの文字ハ無の字の義にハあらず、語の助也、○直指抄の説、まことに明か也、或又、北ハ陽のはしめて生ずる方なれバ、万物いきたるの意歟、冬至子の半。一陽来復すれば也

※東　日向ヒシ也、西　往イニシ也、南　皆見ミナミル也、北　際高キハタカ也、四方ノ名、皆日ニ取ル、右六占

（帖）上・物名・天部・土類2～5「東日向ヒムカヒシ也　出ル日ニ向ヒシヲ云フ、西往イニシ也　日ノ往シヲ云フ、往ハ万葉集ニニト訓メリ、南皆見ミナミル也　冬夏ミナ日ヲ見ルヲ云フ、北際高キハタカ也　タカ反タ、キハタカハ、日ノ往ヌヲ云フ、四方ノ名、ミナ日ニ取ル

（同・56）

牧 きはきつく也、馬をはなちおく所を、人のきつける也

※案、馬ノキタリ居ル所也

（上・四・宮室8～10）

宮 みやハ御屋也、御はたうとぶことば也

屋 やどる意

家 いは居也、ゑハよし也、いよしと云意、よしとゑと通ず、日吉をひゑと云、住吉を住の江と云の類也

※案、ヤハイエノ緩急、ヤドルハ家ニ留ル也、ヤスムハ家ニ住ム也

（上・五・地名12）

相模 舊記曰、昔此國の狩人、其妻にはなれてなげきかなしめり、其妻死ぬる時に鏡をさして曰、われ死して後、我を思ひ慕ば、此か

ゝみを見るへしと云、妻死して其かゝみにうつるすかた、亡妻をみるか如し、其かゝみを祭りて神とす、其社の有国をさかみと云、さかハすがた也、さかみとハすかたを見る也、此神即足軽明神也

※案、武蔵相模、ムサカミムサシモノ畧、ムサハモサ也、平原草莽ヲモサト云、此二国少山多原、故名、上国ニ近キヲ上伝遠キヲ下ト云也

(同・19)

備前備中備後 昔三國をすべて吉備の国と云、後代三国にわかつ、吉備の国と名付しハ、上古の時吉備津彦の居給し國なれバ、名づけしなるべし

※案、吉備国トハ、黍ノ嘉植スル所故名

(同・21)

淡路 あハわれ也、はちハ耻也、わかはちと云意、其事日本紀神代上巻に見えたり(注25)

※案、海ノシホ路アワキ也、内海ユヘ也

(同・27)

壹岐 ゆきなり、いとゆと通ず、浪高くして潮の白き事、雪のことし、是古人の説也

※案、壹岐、行留リノ所ナレバ也

(中六・水火土石金玉17)

金 かたくねる也、石中にあるかねのまふをくたきて、かたくねる也、こがねハきがね也、きとこと通ず、印子ハ金のよきを云由、沈存中筆談にかけり、和語にあらず(注26)(注27)(注28)

※案、堅音ノ義

(同十二・蟲類5)

蟬 せみハせん也、むとみと通ず、音を以訓とす、此類多し(注29)

※案、セミハ此蟲ノ声也、蟬字未渡前ヨリ〆、蓋セミノ名アルナルベシ(注30)

(同十三・魚類1)

鯉 こいはこえ也、其身こえたり、又其味諸魚にこえたり、いとえと通ず(注31)

※立之案、こひハ恋の義、常に二魚雌雄相比行す、ゆへにこひと名つく(注32)

(同・2)

鮒 煑て食するに、骨やはらかにしてなきがごとし、骨なし也、ほとふと通す、ねを略す(注33)

※立之案、ふなハふしうをなり、なとハうをの事なり(注33)

(同・10)

海鰻 唐音なり、和語にあらず(注34)

※立之案、はむなり、牙歯はげしくしてよく物をはむ義なり(注35)

(同・12)

海鰌 黒白也、其皮黒く其肉白し、順和名抄には、くぢらとあり、しとちと通ず(注36)(注37)

※立之案、くちひろ之義

(同・19)

糸 もとハ此魚の名を、つなしと云、此魚をやけば、其くさき事、人をやくに似たり、むかし或人後妻にまよひ、讒を信して、其前妻(注38)

のうめる子を、其家のやつこに命じてころさしむ。やつこ其罪なき事をしりて、ひそかに其子をかくしつかはし、其子のかはりに、つなしを多くやきて、子をころして火葬したるよしを、其父につげゝる、それよりして、此魚の名を、子の代とぞ云ける、子のかはり也、古哥にも、東路のむろの八嶋にたつけふりたがこのよにかつなしやくらん、とよめり

※立之案、このしろは、うろこのしろきなり(注39)

(同・20)

鰷魚 あゆる也、あゆるとハおつる也(注40)、ふるきことば也、春ハのぼり、秋は川上より下へおつるもの也

※案、荒行ノ義

(同・24)

鰤魚 さけハ裂なり、其肉片々にさけやすし、こと魚にかはれり、はらゝ子ハはらにある子なり、あるのるとらと通ず

※立之案、はゝらハ、はら〳〵の略、此魚子、粒ニ相分るゝこと魚ニ似す、ゆへにはゝらこと名つく

(同十四・介類2)

蚫 あはでひかると云事也、あハびは其から片貝にてふたなし、からひかるもの也、故に名つく、一説に、あはでひらく也、ふたなき故、あはでつねにひらけり

立之案、あハではふの義

万葉集巻七寄玉歌云、石著玉、傍訓曰アハヒタマ、因考アワビ者岩添之畧(注41)

(同・6)

蝸蠃 水鳴也、水中にありてなくもの也(注42)

※立之案、みな・にな一音なり、になとはになふなり、殼を荷ひありくゆへ名つく

(下十七・木4)

林 はやす也、木を多くはやすなり(注43)

※立之曰、はやすハふやすなり、一音の轉なり、すへてハヒフヘホハ發生・出張の意あり、ひらく・ふくれる・はびこる・へめぐる・ほきたつの類是なり

(同・65)

棣棠花 山にありて、其花のいろ欵冬のことし、日本にむかしあやまりて、欵冬をやまふきとよめり(注44)

※ヤマフキハ、ヤマハヒ木ナルベシ、ハヒノ反フ也、此者枝幹共ニ柔軟垂下シテ地ニ至リ、或ハ水ニ臨メリ、又欵冬ヲヤマブキトイヘルノ古言ハ、即山中自生フキニ〆、ミヅブキニ分ツノ名也

(同・68)

榎 もえの木なり、凡の木皆もゆ、されども此木よくもえてけふりすくなく、けふり目に入ていたまず、たき火にあたりてよき木なり(注45)

※エノキハ枝ノ木ナリ、小枝繁茂スル木ナレバ、カク名ツケシ也

元言梯同シ(注46)

(同・70)

朴 ほくの音を轉して、ほゝと訓して、和語とせり(注47)

※ホゝハ赤キ義ナリ、此木嫩葉紅芽愛ス可シ、故ニ名ツク、ホ

、ヅキノホ、同義

（同二十二・雑器32）

枕 まハあたま也、上を略す、くらハ座也、物をおく所、坐する所をくらと云、（注48）あたまをおくくら也

※目座也和訓六帖（注49）

（同二十三・虚字48）

青 おほそらをあふけハ其色あをし、あふく・あをし、其音ちかし。くを略せり、しハ助字也、あかし・白しの類なり（注50）

※アヲハアキト同シク、藍ノ色ヲイフ

（同・49）

黄 火にこげたる色ハ黄也、こけいろ也、けときと通音也

※キハ子ノ義、卵中黄ヨリ出タル称ナルベシ

（同・50）

赤 あきらかなる也、朱ハあかなり

※アカハ明ケノ色ナリ

（同・51）

白 しるし也、よく見ゆる意

※シロキヲシロ、丶丶ハ明白ノ名ナリ（注51）

（同・52）

黒 くらきなり（注52）

※クラキヲクロ

略註

（注1）「反語ハかな返し也、はたおりを服部とし、かるがゆへをかれとし、かれをけとし。ひらを葉とし。とをつあはうみをとをたふみとし。あはうみをあふみとし。きゐをけとし。見へをめとし。やすくきゆるを雪とするの類多し」（「日本釋名」凡例第一項―六）。

（注2）「自語ハ天地・男女・父母などの類、上古の時自然に云出せる語也、其故はかりかたし、みだりに義理をつけてとくべからず」（同第一項―一）。

（注3）「ギミガマ」は「日本国語大辞典」や前田勇氏の「江戸語大辞典」に説明があるように、口やかましく咎めだてをする様を示す語である。江戸期の辞書類では、享保二年刊の「和漢音釋書言字考節用集」言辞門に「―（吟）味我慢（俚俗常談）」とあるのを早い例として、嘉永四年の「増補音訓大全早引節用集」や文久三年の「江戸大節用海内蔵」等、幕末に至るまでの節用集の幾つかに採録されており、また「俚言集覧」に「ぎみがみ」のかたちで掲出され（活字本「増補俚言集覧」による）「吟味我慢」の表記が示されているが、いずれも語義の説明が無いか無きに等しい。

（注4）「日本釋名凡例」第一項の七に、母語と子語とを説明して、「子語は母字より生ずる詞を云、一言母となれば、其母字より生ずるを云、日の字を母字としてひる・晷・光を生じ、月を母字として晦・朔を生じ、火を母字として炎・焔・埃を生じ、水を母として源・溝・汀・港を生ずる類を子語と云」とある。また同じく凡例第四項に、「母語を用て子語をとくべし、子語を以て母語を

とくべからず、火は天の日をかりてひと云なるを、日ハ地の火と同じけれバひと云ととき、日とハ物日にあたればひるゆへに日となづくととき、くもるゆへ雲と云の類、是子語を以て母語をとく也、あやまり也」と言う。

（注5）たとえば明暦二年の和刻本「新刻釋名」巻一・釋天の第二項に、「日實也、光明盛實也」とある。

（注6）同「新刻釋名」巻一・釋天の第三項に「月缺也、満則缺也」とある。

（注7）「日本釋名」凡例第五項の中に、「ときがたきは上古の自語多かるべし、又ハ古人の語をつくりし意、今よりはかりがたきゆへに、ときがたしとしるべし」とあり。→注2。

（注8）「由布左礼波久毛為多奈毗吉　くも井とハ。帯にいふ詞なれバ。みな人も心得たるやうにハ侍へれども。若又いかなればいふぞと。たづぬる人あらんときにハ。ことかたき人もあるへきにより て。注し侍へるなり。雲井と云ハ。大かた霞ハ天の気。霧ハ地の気。雲ハ山川の気なり。くもといふ。くは内へまくりいる詞。もハむかふ義。これ雲のすがた也。このすがたハ。小雲にもみなみゆべし。井と云ハあつまることば也。しかれバたかくもあれ。とをくもあれ。其ほどはるかにへだゝりて。山川の気かさなりあつまりたらんハ。雲井といハるべき也」（題簽に「仙覺萬葉集抄」とある無刊記本「萬葉集註釋」巻十七による）。すなわち当該個所は、萬葉集巻十七、天平十九年四月二十七日に大伴家持が詠じた「立山賦一首并短歌」（国歌大観番号四〇〇〇～〇二）に対して、翌二十八日に大伴池主がこたえた「敬和ニ立山賦一首并二絶」中の賦（同四〇〇三）の一節「由布左礼波久毛為多奈毗吉」の「雲井（居）」に関する注である。なお益軒の読書記録である「玩古目録」によれば、彼は貞享四年八月に「萬葉仙覚註」を読んでいる。

（注9）「雲　籠モル也、日月ノ光・ソラノ色ナトコモルヲ云フ」（「和訓六帖」上・物名・天部7）

（注10）三體詩・七言絶句・実接9、張継作「楓橋夜泊」の起句「月落烏啼霜満レ天」（寛永二十年版「増註唐賢絶句三體詩法」による）。なお、この語句はしばしば使われるところであり、直接の出典を必ずしも三体詩に限定する必要はないかもしれないが、「益軒全集」所載の「益軒先生年譜」によれば、彼は寛永十五年数え九歳の時、三体詩絶句の口授を仲兄存斎に受け、朝夕復読し旬日の間に盡く背誦し、生涯忘れることがなかったと言う。→注22、23

（注11）「霜　白」（「言元梯」し・141）。

（注12）「霞　唐韻云、霞赤氣雲也、胡加反和名加須美」（「倭名類聚鈔」巻一・天部・雲雨類第二―2）。

（注13）「嵐　荒風」（「言元梯」あ・13）

（注14）萬葉集叢書第十輯「萬葉学叢刊中世篇」所収本によれば、当該個所は「詞林采葉抄」第六の第13項「七夕姫」の一節。但し勿論引用文と異同がある。「玩古目録」によれば、彼は延宝八年に「詞林采葉抄」を見ている。なお「日本釋名」巻上・一・天象37に「霧」の項あり、「雲・かすみのたちなびく也、ちを略す、一説、たなハ空也、そらに引也」と説明する。

（注15）「言元梯」では、「春　張　艸木芽ヲ張ル義」（は・52）、「夏　温」（な・49）、「秋　朱　草木紅葉ノ義」（あ・14）、「冬　冷」（ふ・41）、「和訓六帖」上・物名・天部では、「春　張ナリ、草木ノ芽張ルヲ云フ、春サリ秋サリハ、春ニナリ秋ニナリ也」（21）、「夏

熱アツ也、春夏トツヾクニヨリ轉ス」(22)、「秋　飽ナリ、穀熟スルヲ云フ」(23)、「冬　ヒユ也　亦秋冬トツヾクニヨリ轉ス」(24)。

(注16)「朔日　月立」(「言元梯」つ・112)、「朔日　月立也　タチハ、春タチ・秋タチノタチト同シ、月立云フヿ、古事記倭建命ノ歌ニ見ユ、万葉集ニモアリ、義少シ異リ、又タチハ起字當ル」(「和訓六帖」上・物名・天部47)。

(注17)巻十七・三九二四「山乃可比　曽許登母見延受　乎登都日毛　昨日毛今日毛　由吉能布礼礼婆」(寛永二十年版付訓本による。以下同)。「玩古目録」によれば、益軒は寛文九年に「萬葉集」を「粗見」、「後年又屢見」たという。

(注18)「前日　遠日」(「言元梯」を・26)。

(注19)巻六・一〇一四「前日毛　昨日毛今日毛　雖見　明日左倍　見巻　欲寸君香聞」。(万葉代匠記・初稿本「をとゝひ」、精選本「ホツヤ　ヤウカモ　アタラ　ミシレトモ　アスサヘ　トツヒ」)

(注20)巻四・七八三「前年之　先年従　至今年　恋跡奈何毛　妹尓相難」。

(注21)「前年　遠年」(「言元梯」を・43)。

(注22)三體詩・七言律詩・四虚10、杜牧「九日齋山登高」の一節「人世難逢開口笑」(寛永二十年版「増註唐賢絶句三體詩法」の本文による。「齋山」は注及び元禄十六年版では「齊山」。また集注本等では「人世」は「塵世」)。

(注23)三體詩・七言絶句・虚接39、李渉「題鶴林寺」の結句。「終日昏昏　酔夢間　忽聞春盡強登山　因過竹院逢僧話　又得浮世半日閑」(同右)。なお第三、四句は「圓機活法」人事門・閒適の結句にも掲示されている。

(注24)「東　日首」(「言元梯」ひ・76)

(注25)「於是、陰陽始遘　合為夫婦、及至産時、先以淡路洲為胞、意所不快、故名之曰淡路洲」(「日本書紀」巻一・神代上　寛文九年版による)。

「神代巻にいはく。陰陽始てみとのまぐばひして夫婦となる。こうむ時にいたるに及て。先淡路洲を以て胞とす。意によろこひさる所也。故に名づけて淡路洲と云。淡路とハ。吾恥と云意とかや」(貝原好古編、元禄九年冬至貝原驚信序、元禄十年刊〔新編和漢事始〕「大和事始」巻一・天地門8「國」)。

「伊弉諾。伊弉冊ノ男女ノ二神。天浮橋上ニゝ。此下ニ豈國无ランヤトテ。天瓊矛ヲ以テ。大海ヲ掻捜給。其鉾ノ滴凝テ。磯馭盧嶋ト成ル。次ニ一國ヲ産給。此國餘リニ。小サカリシ故ニ。吾恥國ト云。我恥ト云心也。今淡路ト云是也」(無刊記本「塵添壒嚢鈔」巻八―4・三種神器事。正保三年版「壒嚢鈔」巻五―46もほゞ同文)。

(注26)「金　堅鍊カタネレ也　カタ反カ、ネレ反ネ、カタネレハ古鉄ヲネリト云フニテ見ヘシ、コガネハキカネ黄金也」(「和訓六帖」上・物名・金類1)。「金　黄金」(「言元梯」・こ111)

(注27)「礦ハ時珍云粗悪也、五金皆有ニ粗石一銜レ之金銀ナト皆石中ニマシリ有レ之ヲ、其石ヲクタキユリテ金銀ヲトル、其石ヲ礦ト云」(「大和本草」巻三・金玉土石1・金　昭和七年白井光太郎考註本による)。

(注28)沈存中「夢渓筆談」巻二十一・異事10に「壽州八公山側土中及渓澗之間、往往得ニ小金餅一、上有ニ篆文劉主字一、世傳、淮南王薬金也、得レ之者至多、天下謂ニ之印子金一是也」(「四部叢刊續編」所収本による)。

「印子金、精金ナリ、古中華ヨリ来ル、其形餅子ノ如シ、又他ノ器ニ製セルモアリ、沈存中カ筆談ト云書此事ヲノセタリ、上ニ篆文劉主ノ字アリト云、或曰、印子金猶鑑雑レリ、非ニ精金一、山金ヲ精煉シタル是真金ナリ、器ニ製スヘシ」(「大和本草」巻三・金玉土石1・金)。

「印子金　出ニ于沈存中筆談一」(「倭爾雅」巻五・宝貨門7)

「自然ト金ノミ塊ヲナシ氷柱ノ形如キハ黄牙ト云、俗名インス、唐山ニテ印子金ト云トハ別ナリ、コレハ唐山ノ通用金ニシテ、形紙門ノ鑑鈕ノ如クス、重五十錢ナルアリ、百錢ナルアリ、色ハ美ナレモ品ハ下ナリト云」「天生牙俗名インス、自然ニ笋ノ状ノ如ク長クカタマリタル金ヲ云、古ヘ和州大峯山中ニ生セシト云フ」(「本草綱目啓蒙」巻四・金石之一・金)。

(注29)「日本釋名」凡例第一項の二に転語を説明して、「轉語は五音相通によりて名づけし語也、上を轉じて君とし、高を轉じて竹とし、黒を轉じて烏とし」云々と述べ、「旦音を轉じて和訓とせし類あり、後にしるす」とする。そして同第七項で、「右にしるせし轉語の内、音を轉じて和訓とする類、文のこゑを轉じてふみと訓じて和語となせり、ふみハふんの轉語なり、錢の音を轉じてせにと訓ず、蟬をせみと訓じ、頓をとみと訓ず」云々と計十八の例をあげ、「此類皆音を轉じて訓とせしなり」とまとめている。

(注30)「蟬……新撰字鏡、蟬・蝉並訓ニ世比一、按関西有レ蟬、聲如レ呼ニ世毘世毘一者、俗亦呼レ蟬為ニ世毘一、蓋以ニ鳴聲一名也、或曰、蟬字音之訛、恐不レ爾」(「箋注倭名類聚抄」巻八・蟲豸部・蟲名38)。「蟬　ソノ鳴声ナリ、田舎ニアリ、声セミ〳〵ト云フガ如シ(以下略)」(「和訓六帖」上・物名・人部・虫類18)。→解題52～53頁。

「蚱蟬　奈波世美　説者謂世美者蟬之音呼与、蟫訓之美同例、余謂不然、世美者　皇國之古言、蓋自蟬聲而得之名与、彼土名蟬自相合耳、或曰美者牟之之縮言、世者之称之衣之急呼、今俗蟬中有呼之祢之祢者、自是一種、然蚱蟬亦呼自伊自伊、亦通、奈波者仁波之音轉、此蟬多在人家園庭間、故名、今俗呼阿夫羅世美者是也」(森立之著「本草經薬和名攷」中〈萬延元年十月枳園書写本の転写本による〉)。

(注31)底本振り仮名「コイ」と本文「こい」の「イ」「い」を朱で見せ消ちにし、各々の字の右横に「と」「ひ」と朱書する。

「鯉　七巻食經云、鯉魚上音里、和名古比」(「倭名類聚鈔」巻十九・鱗介部・龍魚類鯉44)。「鯉　こひ　和名。味のよくて人の恋ひしたふ故の名歟。古歌に恋によせておほくよめり。こい、こゐなと書へからず」(「和字正濫鈔」巻二・ひ)。「こひ鯉　いひ飯　おひ甥……皆ひの字書べし、いの字ゐの字書くべからず」(「和字解」)。

なお、節用集類の大半や倭玉篇・下学集等は「コイ」、寛文版の「訓蒙図彙」や寛永八年版「新刊多識編」それに「倭爾雅」等は「こひ」「古比」「コヒ」、元禄八年版の「頭書増補訓蒙図彙」は「こゐ」、「改正増補多識編」は「コイ」、そして所謂慶長版の「仮名文字遣」は「こひ(この共)こい(こい共)」となっており、仮名表記にゆれが見られる。

(注32)「鯉魚膽　本草和名、古比、按古比者古比志多夫之義、謂恋慕也、此魚毎雄与雌必相雙行、故名、蓋鯉之為言儷也、古来有雙鯉之目、亦取此義耳」(森立之「本草經薬和名攷」上〈上巻は安政六年十月成ル〉)。

(注33)「鮒魚　卧魚」(「言元梯」ふ70)。「鮒　フハソノ字音、ナハ魚ナリ」(「和訓六帖」上・物名・人部・魚類30)。

(注34)「ハモハ海鰻ナリ、唐音ナリ」「唐音ハモ」(「大和本草」巻十三・海魚)。「海鰻　字ノ唐音轉スル也、韻学私言云、海鰻曰ニ

法麼ニト」（「和訓六帖」上・魚類17）。「海鰻　今按はも、蓋唐音之誤也」（「訓蒙図彙」巻十四・龍魚50）。「海鰻　和名波無、俗云波毛、唐音之畧歟」（「和漢三才図会」巻五十一・魚類江海中無鱗魚24）。

（注35）「背尖長クメ歯多シ、已ニ捕タル者モ能人ヲカム」（「本草綱目啓蒙」巻四十・鱗之四―3）。

（注36）「海鰌魚之最大者、泥鰌魚之最小者、雖ニ大小不ㇾ同、其形状相似故以ニ海鰌一称ス」（大和本草」巻十三・海魚11）。「其状畧似ㇾ鰌故名ニ海鰌一」（「和漢三才図会」巻五十一・魚類江海中無鱗魚1）。

（注37）「倭名類聚鈔」巻十九・鱗介部・龍魚類6「鯨鯢　唐韻云大魚、雄曰ㇾ鯨京反、雌曰ㇾ鯢音睨、和名久知良」。「くぢら　鯨　鯢　一云クジラ和名透ヘリ」「（しちすつ）假名文字使蜆縮涼皷集」下）。

（注38）益軒は、宝永六年に成った「大和本草」巻十三・魚之上・海魚25で、「鯛」の見出しの下に本書と同じ説話を紹介し、その末に「又別ニ一説アリ、本朝食鑑第八・二十張、鰤ノ下ニ見エタリ」と記している。「本朝食鑑」の名は、「玩古目録」の元禄十一年と宝永三年の条にも見え、彼が実際に読んでいたことは確実であるが、その「本朝食鑑」巻八・鱗部二・江海有鱗11には、次のような命名起源説話を載せる。「或人語ル余曰、鰤、本訓ニ津那志一、後改ㇾ鰤ニ子代一、曾聞、昔野州室八嶋市中有ニ富商一、生ニ美娘子一、過ㇾ嫁時末ㇾ他適、空在ニ深窓中一、市邊有ニ流寓公子某一、常適ニ富商之家一、而親睦有ㇾ日、遂密通ニ娘子一焉、父母雖預識一而不ㇾ拒、潛思下卒嫁ニ于彼公子一以分ㇾ財同居上、然憚ニ外譏一未ㇾ果、于ㇾ時州之刺吏、聞ニ其娘子甚妹一而覓之不ㇾ畀、於是刺史大慍心常矯ㇾ罪欲ㇾ屠ニ其家一、父母察ニ禍之将ㇾ至、表言曰、娘子遭ㇾ疫俄没矣、新造ニ棺槨一、其中盛ニ鰤魚数百尾一、偽如ニ死者一、而父母親睦喪服引ㇾ柩、俱出ニ于野一、於ニ壙中一茶ニ毗之一、刺史聞而哀歎不ㇾ少、経ㇾ日父母及公子、携ㇾ娘潜出、之ニ他邦一、後人憐ㇾ之作ㇾ和歌而悼ㇾ傷之一、自ㇾ玆呼ニ津那志一、鰤ニ子代一、訓ニ鰤字一、言斯魚代ニ娘子之死一也、予謂ㇾ此言児女之戯談、不ㇾ足ㇾ用ㇾ之、然字訓古称耳」。因に「和漢三才図会」巻四十九・魚類・江海有鱗魚36「鯨」には、右の「本朝食鑑」の話を簡約したものが俗伝として載り、また「東路の」歌が第四句「たかこの代に」の形で掲出されている。さらに時代は下るが「物類稱呼」巻二・動物62「鯖魚（このしろ）」では、「東路の」の歌が「和漢三才図会」と同じ形で載り、「比哥につきて ハ古き物かたり有、普く人の知れる事なれハ、爰に贅せず」とする一方、「或人の云。世間に子生れて死し又生れてハ死す事有。其家にてハ、子生るゝ時、胞衣と鰶とを一所に地中に蔵れバ其子成長す。尤其子一生このしろを食せざらしむ。このしろハ子の代なりといひつたへり」とする説を紹介している。なお「神道集」巻六・三十四「上野国児持山之事」等もこの魚を「子ノ代出焼」いたという型である。

「鰶。子代ナリ、六帖歌、下野ノ室ノ八嶋ニタツ煙タガ子ノ代ト鰤ヤクラン、昔ソノ子死タリトテ鰶ヲヤキ、人ヲ欺キタルヿヲヨミシ也、ソノ臭気茶毗ニ似タリ、サテ又ツナシハツネシキ常如也、ソノ味美ナラザルヲ云フ、故ニ仮ニ鯖字ヲ用ユト見ユ、字昏ニ、鯖庸也、味之不美者トアリ、鯖ハ何ニ當ルヲ知ラス、鰶或鰤字ヲ用ユ、未タ當否ヲ知ラス」（「和訓六帖」上・人部・魚類25）。

（注39）「鰤。甲白　竹取談ニ子代」（「言元梯」こ・94）。

（注40）「あゆる　物の落る事を俗にあゆると云。枕草子に、すゞろにあせあゆるこゝちぞしける、とあり。あせのながるゝ事なれ

ハ、むかしよりかくいへるなり」（貝原好古「諺草」巻六・安・俗語7）。なおこの語は、益軒の生地福岡県をはじめとする九州各地の方言として報告がある。

（注41）萬葉集巻七・一三一九「大海之　水底照之　石著玉　斉而将採　風莫吹行年」。「鰒　岩觸」（「言元梯」あ・220）。「鮑　合肉　アハスミ也」水中岩ナドニ取ツキ合スルヲ云フ」（「和訓六帖」上・魚類61）。

（注42）「河貝子　水鳴　ミツナ也　水中ニ鳴ク故ニ云フ、ニナハ轉ナリ」（「和訓六帖」上・魚類64）。「蝸蠃　螺鰤同、或云尖螺」（「倭爾雅」巻六・蟲介56）。

（注43）「林　生　ハヤス也」（「和訓六帖」上・天部・土類37）。「林　苙　弥茂」（「言元梯」は・97）。

（注44）「棣棠……順和名欵冬ヲヤマフキト訓シ、朗詠集ニモ欵冬ヲヤマフキトス、皆アヤマレリ」（「大和本草」巻十二・木之下・花木7）。

「欵冬　夜末布岐、又称ニ於保波ニ、今案布岐、又案　黄有ニ美豆布岐之名ニ、故以ニ欵冬ニ在ニ陸地ニ、曰ニ也末布岐ニ、又一種花似ニ酴醾ニ者、亦曰ニ也末布岐ニ、是同和名ニ而異物也、古人於ニ万葉中ニ多詠ニ其花ニ、因假ニ其字ニ而書レ之耳、非ニ以レ似ニ酴醾ニ者為ニ欵冬也、万葉多借ニ用字ニ不レ少、後人不レ辨レ之、公任朗詠載ニ欵冬ニ、是已誤矣、況其餘哥乎」（寛永八年版「新刊多識編」巻二・湿草部。なお益軒は「増補多識篇」の方については「不好書也、不可再見」ときびしく批判している〈「玩古目録」延宝六年の条〉）。なお「塵添壒嚢鈔」巻九―16「欵冬事」等参看。

「棣棠花」（「倭爾雅」巻七・艸木門）。

（注45）「ヌノ木ハ焼テ烟スクナク能モユ故、タキ火ニ用ユ」（「大和本草」巻十二・木之下・雑木42）。

（注46）「榎木　枝木　朶茂木也」（「言元梯」江・15）。

（注47）「厚朴　保々加之波之岐　今俗呼保々乃岐者是也、保々者赤之義与保々都岐之保々同、此物嫩葉紅色、漸大而変青色、形如槲葉、故名与（以下略）」（「本草經薬和名攷」中）。

（注48）「枕　天顔座」（「言元梯」ま・119）。

（注49）「枕　目座　メクラ也　眠ルタメノクラヲ云フ」（「和訓六帖」上・人部・衣服付褻器42）。

（注50）「藍　あいはあをいろ也、をろを略せり」（「日本釋名」下十六・草43）。「藍　天居　青ニ同シ、天色トモ云也」（「言元梯」あ・250）。

（注51）「白　明」（「言元梯」し・22）。

（注52）「黒　暗」（「言元梯」く・19）。